

埴 美智子(アートライター)

マルセル・デュシャンは1912年に、友人フランシス・ピカビアの運転する自動車に乗り、次のメモを『グリーン・ボックス』に入れた。

「1912
五つの心臓を持つ機械、ニッケルとプラチナでできた純粋な子供はジュラ＝パリ間の道路を支配しなければならない。

一方では、裸の五人のうちのリーダーはこのジュラ＝パリ間の道路に向かって裸の他の四人の先頭に立つだろう。他方では、子供＝ヘッドライトはこのジュラ＝パリ間の道路の征服の道具となろう。

この子供＝ヘッドライトは、図形的に言うと、彗星になるかもしれない。この彗星は尾を前方になびかせるような彗星である。……(中略)……

この道路は(裸の五人のうちのリーダーのところの)その始点で、幅、厚み、等々が完全に終了し、少しずつ地形学的形態を失ったものになり、あの観念的な直線に近づく。この直線は子供＝ヘッドライトのうちに無限に向かう穴を見出すのである。」¹

当時の最先端技術である自動車に乗車した印象が、高揚した描写でここに書き留められていた。速度の美を象徴する自動車は、未来派の芸術家たちによって賛美されたが、マルセル・デュシャンという人もまた、創作の源泉に自動車＝「機械」を置いたのだった。彼らの生きた20世紀初頭という時代には、近代化した文明社会の拡大を表すかのように、自動車は直線のイメージで表象され、ヘッドライトが照らす道は「無際限」に開かれているはずだと考えられた。

さて、それから時代は百年下り2012年、國府理の《営みの輪》では対照的に、軽トラックが閉じられた部屋の中を円を描きながら旋回していた。きわめてゆっくりとした速さで、まるで内省するかのようである。部屋の四方にそのヘッドライトが映していたのは、直線の先のまだ見ぬ風景ではなく、自らの過去の創作の記憶であった。近代の芸術家たちと同じように、彼もまた、「機械」という人間文明の到達した一つの結晶に、ただならぬ憧れを抱いていただろう。しかし、一世紀の間に、その発展の行き過ぎによって帰結するところを、私たちは学んだのだ。

こんな時代の、ヒューマニスト(人間中心主義者)。

旋回するヘッドライトの少し前、アートコートギャラリーでの《Typical Biosphere》の展示の際、國府が語った迷いについて印象深く聞いた。——植物にとってよりよい環境を構想し、機械の設計を試行錯誤するが、その努力は届かず、だんだんと植物が弱っていく。いっそ、始めからこんな環境に切り離して置かない方がよかったのではないかと思うが、そうするとこの作品というものは成立しない。

この人工庭の装置のような作品は、失敗に終わった巨大な閉鎖生態系実験施設「バイオスフィア2」に着想を得たそう。我々が置かれている生態系もまた永遠ではなく、有限性を持ち、後戻りの効かないものであるという意味を込めて、「Typical」と形容したという。これは前述の迷いの根本を受けると、まるで自虐的なアイロニーのようにも聞こえるだろう。だが、作家の当初の意図はそうではなかった。機械が自然へ介入することの結果は、譲り合いを生み、「楽しげな空間で、皆が幸せになれるような場所」が生み出される構想だったはずだ。²

文明は、自然を圧倒し、その破壊は不可逆である。人間の歴史を顧みるならば、自然に対する人為的影響をリセットすることはできないものだ。それならば、文明と自然の調和する地平を見つけなければならない。そのテーゼに、迷いながらも取り組む姿は、まるで文明の功罪をただひとり受け止め、その終末問題に対峙しているかのようだった。

その態度が結実したものは、《水中エンジン》だっただろう。(ヘッドライトの旋回と同じ年に発表された。)一般的に、熱を発生する動力機械というものは、オーバーヒートを防ぐために、ラジエーター等で冷却し続けなければならない。この作品では、タイトル通りにむき出しのエンジンを、水中に直に浸けることで冷却する方法をとっている。東日本大震災後、原発事故という文明がもたらした極限状況の最中で(今もそれに変わりが無いが)発表されたこれが、モチーフにしているものは明らかだ。水中で機械を動かすという荒技に、エンジンが止まってしまったりとトラブルが絶えず、常にメンテナンスを必要としていたようだが、それさえも不確実な状況を象徴しているかのようだった。(しかしながら、水槽の中の透明な領域に吊るされ、動力によって熱を伝えるエンジンのその姿は、どういう巡り合わせか、デュシャンのあのガラスの「花嫁」の姿を想起させはしないだろうか。)

國府の作品は、即物的でありながら、空想を喚起させる。想像力というものは、人間にのみ与えられた能力だとされる。これによって人は、現実を一旦括弧に入れた上で、現実にはないもの・現実とは違うものを、あたかも現実に存在するもののように心の中に生じさせ、現実へと働きかけることができる。彼の空想は、直線の先ではなく、閉じた円環の向こうにある未来についてのものだ。現実を越えて想像された未来の一部を具現化し、提示すること。おそらく、私たちの多くが未見の彼の最新作の中では、人間と文明の共存する在り方——「機械」を含めて循環するエコシステムの姿が実現していたのではないか。そのとき「機械」は自然に対して外側に立つのをやめ、その生態系の内部に等価物として組込まれているのだろう。きっと、そんなユートピアに到達した途端に、彼は忽然と私たちの前から別次元へ姿を消したのだ。

1. ミシェル・サヌイエ編、北山研二訳『マルセル・デュシャン全著作』未知谷、1995年、pp.56-57

2. 「國府理インタビュー」『PEELER』2009年7月29日 (<http://www.peeler.jp/people/kokufu/index.html>)